



幼稚園誕生の時代

—— 関信三の葛藤 ——

国吉 栄

(五) 受洗

受洗の背景

横浜のキリスト教界に潜入した安藤劉太郎（関信三の謀者時代の名前）は、明治五年二月二日（西暦三月十日）、ついに宣教師バラから洗礼を受けた。

この日洗礼を受けたのは、彼を含めて九人。これに、すでに洗礼を受けていた二人の信者を加えた十一人を

もって、同日、日本初のプロテスタント教会である日本基督公会が創設された。安藤劉太郎は、日本基督公会創立メンバーのひとりとして、日本プロテスタント史に、深くその名を刻まれることになったのである。

では、安藤劉太郎はなぜ洗礼を受けたのであろうか。この日九人の青年たちが洗礼を志願するに至った事情

は、バラによればこうである。「一八七二年一月（西暦）、ひとりの青年が、集会のため昼の十二時から一時まで教室を使ってもよいかと聞きに来た。何の集会かと尋ねると祈禱会だという。学生たちは、外国人たちが新年初頭祈禱会を開いて一週間世界のために祈っているのを見て、自分たちも同じように日本のために祈ろうと考えたのであった。同意すると、よかつたら先生も来てくださいと言われ、私も参加した。（略）この祈禱会はその週も次の週も、その月が終わるまで続いた。（略）こうした日々の中で三月十日（西暦）に洗礼式が執り行われ、日本基督公会が誕生したのである」（J.H. Ballagh: "Shinonome, Day-Dawn, or The Beginnings of the Kingdom of God in Japan" 未公刊）。

安藤劉太郎は、これらの学生たちに混じって、バラが、「私がい実際に体験した初めての「リバイバル」、と呼んだこの熱烈な祈禱会に参加していた。祈禱会の参加者の回想記に、次のように安藤劉太郎の名が出ている。

「集まった人々は、午前学校に出入りする青年を始め、小川夫妻、（略）竹尾録郎、篠崎桂之助、安藤劉太郎、進村漸、押川方義、吉田信好、植村正久等が、その中に居たと確かに記憶される。（略）これらの人々多き時には三四十名。少なきも二十名を下らず。毎日集まって使徒行伝の講釈を聴きつつ祈ったのである。彼らの中に既に洗礼を受けていたのは小川氏のみであったが、しかし皆盛んに祈ったのである。泣くのも数々あった。その言葉も調子も、始めての人には甚だ異様な感じを与えたのである。しかし何人もその熱心に打たれざるを得なかつたであろう」（佐波宣『植村正久とその時代』一卷 教文館 昭和51）。

安藤劉太郎が率先してこれに参加していたことは間違いない。彼自身の報告書に、「晚餐祈禱等惣シテ彼カ宗式ニ任セ一身正ニ死地ニ入り」とある。学生たちの思いは熱く、祈禱会出席者の中から洗礼を志すものが出てくる。その熱気の中にいて洗礼は免れないと覚悟を決めた

のであろう、彼は上司に状況を報告し、受洗の許可を受ける。彼自身の言葉によれば、「不本意ながら、御内許、教師バラより受洗」、となる。

けれども、彼が洗礼を受ける覚悟を固めた背景には、もうひとつ別な要素があった。ちょうどこの頃、安藤劉太郎はひそかに重要な指令を受けていたのである。前々回、「諜者報告書」について書いたときに紹介した、「深堀事件」にかかわる指令である。

明治四年十一月末、長崎深堀地区で、キリシタン数千人が逮捕された。英国領事の強い抗議によって、事件はにわかに関外交問題化し、政府はやっつきになって騒ぎの収拾に努めていた。この件に関して、外国人たちがどのような動きをしているか探るべしとの命令が、安藤劉太郎に下されたのである。これは重要かつ緊急な任務で、安藤劉太郎ひとりでは手が足りないので加勢を投入した、と記した太政官の名入り用箋が大隈文書に収められてい



る。太政官諜者として深堀事件に関わる指令を受けたのとほとんど時を同じくして、安藤劉太郎もその中心の一員であったバラの英語学校の学生たちの熱気が盛り上がっていったのである。安藤劉太郎にとって、まさに正念場であった。

安藤劉太郎は自ら洗礼を受けることを志願した。確かに、安藤劉太郎の受洗は、信仰熱の高まりの渦中において、上等諜者として避けることのできない選択であったろう。しかし一面では、彼自身の意思によるものでもあった。追いつめられていたからこそ、敵陣深く潜入して起死回生の策を手に入れなければと考えたのである。彼は自分が護法の最前線に立っていることを自覚していた。ぐらついている政権首脳にキリスト教禁止の政策を

断固貫かせるためには、最前線で踏みとどまって、情報を届け続けなければならない。これは彼にとって最後の賭けであった。

けれども、たとえ任務とはいえ、自分が忌むべき邪教の洗礼を受けるなど、思いもしなかったことであろう。

彼は兄安休寺に事情を知らせる手紙を書いたはずである。兄も弟も、ふるさとはその「事実」を受け入れることができないことを知っていた。兄は生涯、弟の過去を隠し続けた。それは、弟が諜者であったということより、キリスト教の洗礼を受けた、という一点のためであったろう。受洗を前に、安藤劉太郎の中には、もう自分は引き返せない所まで来てしまった、という思いがあったのではないか。志を果たさぬまま故郷に帰ることはできない。事ここに至れば何とか自分の目で見極めようと、思いを固めたのであろう。

洗礼式の報告書

洗礼式の記録は、日本基督公会の「公会日誌」に残さ

れているが、数行の事務的な記録にすぎない。一方、諜者によって当局に提出された報告書には、「公会日誌」とは比較にならない詳しい報告がなされている。

この日の模様については、実に三人の太政官諜者が報告書を提出している。一人はもちろん、当日受洗した安藤劉太郎。ただし、残念なことに、この時の彼の報告書は大隈文書には保存されていない。二人目は長崎光永寺住職正木護。長崎時代、潜伏中の猶龍をかくまった人物である。彼は日本基督公会の二回目の洗礼式で受洗する。もう一人は「諜者某」で、彼の報告書が最も詳しい。当日朝九時の集合から、「日本基督公会」設立準備の話合い、長老選挙、昼食散会をはさんで午後三時から洗礼式の模様、聖餐式の様子など、日本初のプロテスタント教会設立の一日が詳しく記録されている。

「諜者某」によって、洗礼式の様子を紹介してみよう。

「(略) 教師上座ニナオリ右九人ノ者ヲ前ニス、メ、初

二小川仁村ノ兩人ヲシテ一々彼ヲニ宗義ヲ試問セシム。

後ニ教師自ラ一人一人ニ対シ数ケノ試問ヲナス。生徒一同慎ミテ答エ、今日先生ノ尋ルトコロ且示ストコロ、我等身命ヲ投シ堅ク相守ルベシト。遂ニ教師ハ天ニ向テ祈禱文ヲ称エ、手ニ鉢ノ水ヲ取り、云ク。篠崎桂之助、我、父ト子ト聖靈ノ名ニヨリテ爾ニ洗礼ヲ授ク、ト云ツツ首ニ水ヲ注グ。余ノ八人又是ノ如シ。終リテ又長々祈禱文ヲ称フ。ソノ言語実ニ聞クニ忍ビズ。既ニ洗礼ノ式終リテ教師云ク。今日神ノ導ヒキニヨテ吾等兄弟ノ交リヲ結ブコト、私シニ於テイトモ難有存シ。私シ日本ニ来リシ以来始テノ喜ヒテアリマストテ、両眼ヨリ涙丸ヲ洗ス。其アリサマ筆ニノセ難シ」

私が「諜者某」の報告書を引用したのは、彼の報告書が一番詳しい、という理由からだけではない。はからずも、彼が実に意外な人物であることを知ったからである。関信三の知られざる生涯を辿るうちに、私はいつのまにか、政治史、仏教史、キリスト教史の裏面史に足を

踏み入れてしまったらしい。これまでプロテスタント史では明らかにされていなかった「諜者某」の諜者名と教会内での名前を知ったのも、その過程のことである。論証はここでは省略するが、「諜者某」は、諜者名「豊田道二」、教会内での通名は「仁村守三」。洗礼式において受洗志願者を諮問した人物の一人である。彼は東京担当の上等諜者で、かつて浦上のキリシタン大逮捕で功績を上げ、長崎県庁から報奨金を受けた西本願寺の破邪僧であつた。

日本プロテスタント教会にとつて記念すべきこの日、何人もの諜者たちがその場に立ち会つていた。諜者たちは、部外者として、雑踏にまぎれて様子を盗み見していたのではない。あるものは宣教師のかたわらに立つ諮問者として、あるものは信仰を告白し頭に水を注がれる受洗者として、あるものはそれを見守る求道者として、その場に臨んでいたのである。彼らは皆、太政官諜者、つまり、内閣派遣の諜者であつた。なんと異常なことでは

ないか。しかし、異常ではあるが、キリスト教に対して
政権が根強く抱いていた警戒感が如実に表れた、この時
代の正確な縮図であったとも言えるのである。

また、関信三の生涯を考えるに際して、三人の諜者が
いずれも東西本願寺の破邪僧であったことも、覚えてお
かなければならないだろう。彼らは、自らの身体をはつ
てまでも政府の宗教政策に影響を及ぼさねばという、ぎ
りぎりの局面に追い込まれていたのである。

諜者たちのねらいは、キリスト教の危険性を絶えず当
局に報告し続けることによって、政府がキリスト教禁止
政策を放棄しないようにすることであった。洗礼を受け
て教会の内部に入つてからは、さらに一歩進んで、政権
が教会を弾圧せざるをえない状況をつくり出そうと試み
ていた。キリスト教にかかわる人物を通報しただけでは
政府は動かないことを、すでに十分に知っていたからで
ある。

第一回の洗礼式が行われてからほどなく、日本基督公

会の最初の公会規則が定められた。安藤劉太郎の報告に
よれば、その討議の場で次の三条を規則に入れるかどう
かが激しく論じられたという。

すなわち、

第一条 皇祖土神の廟前にひざまずいて拜むべからざる
こと

第二条 王命といえども道のためには屈従すべからざる
こと

第三条 父母血肉の恩に愛着すべからざること

安藤劉太郎と豊田道二は、公会規則にこれらを盛り込
ませたかったが、「教会外からの責めを怖れる者あり」、
見送られた、と安藤は上司に報告している。彼らは、あ
たかも国家に反逆するような信条を公に掲げさせること
によって、政府が厳しい措置をとることを期待したので
ある。しかしもくろみに反して、公会内部の議論では慎
重論が優勢であった。慎重論が優勢であったのは、安藤

がいうように彼らが責めを怖れたため、とばかりは言えない。むしろ、教会を弾圧する側に口実を与えないためであつたと見ることもできるだろう。

政府にキリスト教断固禁止を訴える安藤劉太郎の論点は、キリスト教を許せば皇国が減びる、という点にしばらくられていた。すなわち、キリスト教は第一に、天皇を神と認めない。第二に信仰のためには為政者の命令にもそむく。第三に祖先血肉を軽んじる。これは安藤劉太郎だけの論法ではなかつた。かつて長崎において宣教師フルベッキのもとに出入りしていた僧たちは、フルベッキが不思議に思うほど、しきりに十戒の日本語訳を欲しがつたという。僧たちは、十戒の初めの、「我のほか何者も神としてはならない」という一条を、反キリストの金科玉条にしてきたのである。皇国が減びるぞと迫ることが、彼らにとつては、為政者を動かさうる最も効果的な方便であると思われたのだろう。



野毛大聖院下

野毛大聖院下豆腐屋トナリ片山龍太郎方。安藤劉太郎の下宿先である。

野毛の丘陵は、居留地を監視するために開かれ、発展した地域である。「のーげのやまからノーエ のーげのやまからノーエ のーげのサイサイ 山から異人館を見れば……」というサイサイ節は、野毛のこんな様子を歌つたものであろう。

ある日、横浜開港資料館での調べものを切り上げた私は、今日こそ安藤劉太郎が下宿していた場所を探したいと、野毛の方向に足を向けた。それまでに何度も古地図等で見当はつけていたが、どうもはっきりとわからな

い。まずは大聖院の場所を確かめたい。

ようやく尋ねあてた大聖院は、震災で焼かれて移転していた。それ以前は、JR桜木町駅の西側に位置する野毛坂の上、現在マンダリンホテルが建っている場所にあったという。ホテル前を走る主要地方道横浜駅根岸線をはさんで、その手前までがかつての大聖院の境内である。となりの戸部の集落から大聖院のわきを抜けて野毛浦に至る切り通しが、当時、東海道から横浜への唯一の陸路であった。「野毛大聖院下」というのは、大聖院わきからその切り通しをまっすぐに野毛橋（現在の都橋）に向かって下りた野毛通り界隈をさしている。野毛橋の先は関内。居留地である。

けれども「豆腐屋」が見つからない。今回は、野毛界隈をうろうろして、豆腐屋と見れば創業時を尋ねて、ほとんど足が棒のようになってしまった。今回も野毛通りを行ったり来たりしていたが、ふと目についた古書店がなんとなく気になって、思いきって入ってみた。ご主人

は、昔のことならあの人に聞いたらいいと、ひとりのご老人を紹介してくださった。

明治二年に祖父が板橋から移住して野毛橋のたもとで小さな魚屋を開いた、という古老の話によると、関東大震災までは、野毛の下り坂がおりきったあたり、居留地向かって右側の一画に、「豆腐屋」があったという。

「野毛大聖院下豆腐屋」である。安藤劉太郎はその「トナリ」、に下宿していた。交通の要所、居留地とは目と鼻の先である。

横浜の開港とともに急速に開かれた野毛一帯は、明治になると、一層大きく変貌する。その最大の要因は鉄道の敷設であった。明治二年、野毛浦海面を鉄道敷設用地として埋め立てることが布告され、埋め立てられた野毛浦沖、現在の桜木町駅が建っている所に停車場が造られることになった。安藤劉太郎が大坂から横浜に転じ、野毛に下宿を始めた明治三年末には、未だレールは敷設さ

れていなかったが、すでに埋立工事は完了していた。彼の下宿先から一望の、手が届くほどの距離である。

翌四年九月二十日には、大隈重信、後藤象二郎、木戸孝允らに乗せて、横浜・神奈川間の試運転が行われ、五年五月七日には、品川・横浜間の鉄道が仮開業して一般の人々が利用できるようになっていた。ただつぴろい新開の埋立地に、大勢の人力によってレールが敷かれ、やがて黒い煙を吐きながら轟音を響かせて汽車が走り、目の前の停車場が多くの人々にぎわうようになるまでの一部始終を、安藤劉太郎は目のあたりにしていたことになる。機械文明の申し子であり最強の輸入品である鉄道は、圧倒的な力をもって、いとも簡単に日本人の暮らしに切り込んでいった。当初政権内部にあった鉄道不要論、もしくは時期尚早論はすっかり陰をひそめたという。

野毛の風景を変えたばかりでなく、安藤劉太郎の心を寒からしめたもうひとつの要因は、明治三年、野毛山に



造営された伊勢皇大神宮であった。国家権力を誇示し、神道によって人民を統治するために、野毛の隣村戸部の丘陵にあった小さな社が居留地を真下に見下ろす野毛山の頂に移されて、横浜の総鎮守とされたのである。この時、野毛山は伊勢山と名前を変えられた。

新殿造営が一応の形をとった明治四年四月十五日、正遷宮が執り行われた。権令井関盛良は、町々の総代に対して大々的な祭礼を行うことを命じた。二日にわたる祭礼は横浜各町が競って山車や踊りを繰り出し、御馳走、引出物など、華美の限りを尽くしたという。この祭を安藤劉太郎はどのような思いで眺めたことか。その後も諸施設の建造が続き、参道が整備され、茶屋も作られ、野毛の丘陵はすっかり変わっていく。彼はその有様も、

日々にしなければならなかった。

安藤劉太郎が洗礼を受けた翌月の明治五年三月、神道中心の「神祇省」が廃止され、代わって「教部省」が設けられた。けれども、仏教界が一縷ののぞみをかけた教部省の設置は、現実には仏教界を最悪の状況に置くことになった。「大宣教」の名のもとに「神仏儒」が束ねられ、これまで排除されていた仏教も加えることに改められたが、実態はあくまでも神道中心にまとめあげようとするものであった。芝増上寺に宗教政策の中心として大寺院が置かれ、本尊は他に移されて、かわりに神道の神が祭られた。僧侶は神官と共に教導職に任ぜられ、教部省に出仕させられた。教導職には、教部省が示す「三条教則」に従って人民を教化することが等しく強制された。「三条教則」とは、敬神愛国の旨を存すべき事、天理人道を明らかにすべき事、皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事、の三条で、僧侶は仏話することさえ許されなかったのである。

安藤劉太郎の下宿は、あまりにも皮肉な場所に位置していた。忌むべき異教がはびこる居留地が山手にまで勢力を広げているのが、下宿からも一望できた。背後の山の頂には、すべての住民をその氏子に組み入れた大神宮が、呑み込まんばかりに彼を見下ろしていた。浜に目が転ずれば、西欧の機械文明の華ともいえる鉄の道に人々が吸い込まれていく。今や「開化」の勢いはだれにも止めることはできなかった。

国家権力の象徴である大神宮を背にし、異教界を目指す毎日の道行は、彼に前途の希望と野心を抱かせたであろうか。異教界のざわめきを背に、暗い森の頂に神殿がシルエットのように浮かび上がる伊勢山に向かって歩む毎夕は、仏教の孤立を嫌が上にも実感させたであろう。彼の下宿は、自ら政府の手足になりながら、その施策によつて追い込まれていく安藤劉太郎自身を象徴するかのような住まいであった。

古老のお話をうかがって、安藤劉太郎の下宿の地に

立ったのは、もう夕暮れだった。ネオンがまたたき、パチンコ屋の音が聞こえてくる。今は繁華街となつて昔日の面影はないこのあたり一帯に、朝となく夕となく、重い心を引きずつて歩き巡つた安藤劉太郎の足跡が、今なお残っているように思われて、桜木町駅に向かう私の足取りも少し重かつた。

転機

明治五年夏、安藤劉太郎に転機が訪れる。海外事情視察のため東本願寺法嗣現如が洋行するにあたり、随行を命ぜられたのである。

安藤劉太郎が「信徒」となつて、すでに半年以上が過ぎていた。使命のためとはいえ、人をたばかり、自らを偽る生活は、息苦しいものであつたに違いない。諜者報告書の中で、豊田道二は、「偽善者之我輩最早接し難き勢ひ」と、苦しい心情をのぞかせている。彼はキリスト者を装う我を「偽善者」と呼んだ。そこにはもはやキリ

スト教徒を邪徒とする考えはない。自分こそ偽善者なのだ。護国のためという大義では、自分自身を義とすることはできなくなつていた。しかし、真情を偽つて教会にとどまらなければならぬ以上、なお一層偽善者であり続けなければならぬ。しかも、キリスト教阻止という彼ら本来の目的は、すでにほとんど空しいものになつていた。立脚点と目的が危うくなつてなお、このような生活を余儀なくされていく諜者たちには、名状し難い不安と喪失感がまわりついていたのではないだろうか。当時安藤劉太郎が、自分自身を偽善者ととらえていたかどうかは明確ではない。しかし彼にとつても、「同信の友」から示される厚情は耐えがたかつたはずである。洋行は、このような窒息状況から一挙に彼を救い出すものであつた。

今回は、洋行における彼の経験について書いてみたい。